

日文研が輩出した中国の医学史研究者たち

梁 嶸

現在、中国大陸の医学史界では 100 人規模の学者グループが活躍している。その主要メンバーの一部は、日本の京都にある国際日本文化研究センター（以下、「日文研」と称する）から輩出された研究者たちである。

日文研には名高い科学技術史研究の基地があり、医学史はその最も重要な一つである。日文研の科学技術史研究の最初の代表者は山田慶兒氏であり、栗山茂久氏と Frederik CRYNS 氏がその後を継いでいる。中国大陸の一部の医学史研究者は、日文研という系統だった研究体系、緊張感のある研究環境、厳格な研究風土、活発な雰囲気を持つ殿堂で学術の養分を多く吸収した。日文研を出た研究者たちは、中日医学史の研究と交流活動を継続し、中国大陸の学者と学生に日本医学史研究の状況を知らせる架け橋となり、国際医学史研究分野でも活躍している。ここでは 5 人の学者をご紹介します。

1. 廖育群

中国科学院自然科学史研究所研究員、元中国科学院自然科学史研究所所長、中国科技史学会理事長、『中国科技史雑誌』責任編集などを担当。1994 年、廖育群氏は山田慶兒氏の招きにより、外国人研究員として日文研に 1 年間滞在した。日文研にいる間、廖氏は日本の漢方医学の特徴を検討し、漢方医学の脚気と腹診について深く考察した。

廖氏が山田慶兒氏と知り合ったのは、1983 年、大学を卒業したばかりの廖氏が中国を訪問された山田氏を空港まで出迎えに行った時のことである。これをきっかけに、山田氏から医学史を教わり始める。廖氏は山田氏の論文の翻訳を始め、それを通して山田氏の研究方法を学んだ。「私はもう一つの研究方法と思考を知った。目からウロコが落ちたような感じがした。それは分析の方法というものだ。すなわちよく見られる歴史的現象をできる限り詳細に描写したり、わざと「成果」や「科学性」などを掘り出したりするという当たり前の「パターン」から抜け出して、歴史現象に理性的な分析と考証を加え、現象の後ろに隠

された思想の脈絡、異なる時代に存在する多数の現象間の関連性と発展の脈絡、関係がないように見える現象のつながりなどを考察することだ。ある部分の欠如が原因で、脈絡の発見と構築が阻まれた場合は、大胆な仮説（作業仮説）でシステムを構築し、また博引旁証で緻密に考察して仮説を裏付ければよい」と、廖氏は語る¹。

廖氏が翻訳して中国の医学史界に紹介してきた山田慶兒氏の主要な論文と著作は、『夜鳴之鳥』『古代東亜哲学と科技文化—山田慶兒論文集』（図1）、『中国古代医学的形成』（図2）などである²。

廖氏は医学の史料分析の方法によって、中国医学史上の重要な典籍『黄帝内经』『傷寒論』および歴史的時期を考察し、『岐黄医道』『重構秦漢医学図像』『繁露下の岐黄春秋—宮廷医学と生生之政』『医者意也』『医工』『伝統医学縦横談：漫步在科学与人文之間』等の代表作を著した³。また、日本医学史に関しては、『遠眺皇漢医学』（図3）、『扶桑漢方の春暉秋色：日本伝統医学と文化』（図4）、『吉益東洞—日本古方派的“俗宗”与“魔鬼”』（図5）等を発表している⁴。

廖氏は日本の漢方医学を研究する代表的な研究者であり、分析考察を重んじる日本医学史の研究方法を中国に紹介した。近年、復旦大学・浙江大学・北京中医薬大学などで医学史教育を行っている。廖氏の著書を通して多くの若い研究者が医学史研究に携わり、日本の漢方医学およびその歴史を知るようになった。

1 廖育群「我所認識的山田慶兒先生」『國際漢学』2000年2月、57-65頁。

2 廖育群「夜鳴之鳥」劉俊文主編・杜石然等訳『日本学者研究中国史論着選訳』（第10巻）、北京：中華書局、1993年、231-269頁；山田慶兒著・廖育群訳『古代東亜哲学と科技文化—山田慶兒論文集』沈陽：遼寧教育出版社、1996年；山田慶兒著・廖育群等訳『中国古代医学的形成』台北：東大圖書股份有限公司、2003年。

3 廖育群『岐黄医道』沈陽：遼寧教育出版社、1991年；『重構秦漢医学図像』上海：上海交通大学出版社、2012年；『繁露下の岐黄春秋—宮廷医学と生生之政』上海：上海交通大学出版社、2012年；『医者意也：認識中医』桂林：広西師範大学出版社、2006年；『行走辺縁の医工師徒：周潜川と廖厚沢』鄭州：大象出版社、2013年；『伝統医学縦横談：漫步在科学与人文之間』上海：上海交通大学出版社、2014年；廖育群『遠眺皇漢医学—認識日本伝統医学』台北：東大圖書股份有限公司、2007年；『扶桑漢方の春暉秋色：日本伝統医学と文化』上海：上海交通大学出版社、2013年；『吉益東洞—日本古方派的“俗宗”与“魔鬼”』上海：上海交通大学出版社、2009年。

4 廖育群『遠眺皇漢医学—認識日本伝統医学』台北：東大圖書股份有限公司、2007年；『扶桑漢方の春暉秋色：日本伝統医学と文化』上海：上海交通大学出版社、2013年；『吉益東洞—日本古方派的“俗宗”与“魔鬼”』上海：上海交通大学出版社、2009年。

た。廖氏はまた、医学者と歴史・文化研究者との共同国際医学史シンポジウムや、青年医学史研究会を主催する他、国内の雑誌で若手研究者の論文を紹介するなど、中国・日本・欧米の医学史に関する研究、医学者と歴史・文化研究者間の学術交流を推進している。



図1. 訳著『古代東亜哲学与科技文化』



図2. 訳著『中国古代医学的形成』

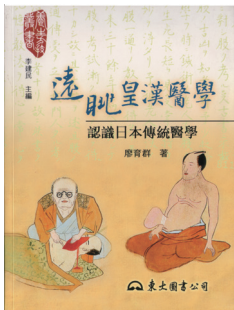


図3. 『遠眺皇漢醫學』



図4. 『扶桑漢方的春暉秋色：日本伝統医学与文化』



図5. 『吉益東洞—日本古方派的“岱宗”与“魔鬼”』

2. 鄭金生

中国中医科学院医史文献研究所研究員、元所長。1995年、茨城大学人文学部の真柳誠教授が、北里研究所医学史研究部で研修中の王鉄策氏とともに中医科学院医史文献研究所を訪れた際、所長だった鄭金生氏は「日本現存中国散逸古医籍の分析」という研究計画を紹介された。この研究は翌96年に日本国際交流基金アジアセンターから3年間の資金援助を受け、以来、鄭氏は日本に現存する中国散逸古医籍の調査・復刻・帰還に十余年にわたって取り組むことになる。

1999 年、鄭氏は真柳氏の助力を得て、日本学術振興会の助成により日本で 10 カ月にわたって中国散逸古医籍を調査している。その期間中、鄭氏は日文研の栗山茂久氏の招きで医学史研究班のメンバーとなった。鄭氏は海外研究者との交流を通して、医学史に対する歴史文化研究者と医学者の異なるアプローチに着目し、相互間の交流に積極的に貢献している。現在、北京大学・南開大学・復旦大学・陝西師範大学等の多くの大学の歴史学者が中華医学会・医学史学会に加入して、共同で広い視野の下に医学史研究を行っている。

鄭氏は、中国散逸古医籍の帰還の責任者でもある。『日本現存中国稀覯古医籍叢書』⁵、『海外回帰中医善本古籍叢書』⁶、『海外回帰中医善本古籍叢書・続』⁷、『海外回帰中医古籍善本集粹』⁸、『珍版海外回帰中医古籍叢書』（復刻版）という 5 種類の叢書シリーズを出版している（図 6-10）⁹。これに関連し、鄭氏は日本内閣文庫所蔵古医籍調査に関する論文も発表した¹⁰。

また、鄭金生氏主編の『海外中医珍善本古籍叢刊』が、2016 年に中華書局より復刻出版されることになっている。世界各地から中国に帰還した散逸古籍は総計 427 部で、うち 397 部は日本で保存され、全体の 92.5% を占めている。日本から中国に帰還した散逸古医籍は、現代中国の医学研究において重要な役割を果たしている。中日研究者が共同で日本現存の中国散逸古医籍の調査・復刻・帰還に取り組むことは、現代中日医学文化研究者の学術交流と友好の現れであり、中国古代医学から日本が恩恵を蒙ったことに対する日本医学会からの恩返しとも受け取れる。

3. 梁永宣

北京中医薬大学医学人文学部教授、北京中医薬大学図書館館長、中華医学会医史学会主任委員。梁永宣氏は、1999 年と 2007 年に笹川医学奨学金を得て、茨城大学で 1 年ずつ客員研究を行っている。1999 年の滞在中には、日文研の栗

5 馬繼興等編『日本現存中国稀覯古医籍叢書』北京：人民衛生出版社、1999 年。

6 馬繼興等編『海外回帰中医善本古籍叢書』北京：人民衛生出版社、1999 年。

7 馬繼興等編『海外回帰中医善本古籍叢書・続』10 冊、北京：人民衛生出版社、2010 年。

8 曹洪欣主編『海外回帰中医古籍善本集粹』北京：中医古籍出版社、2005 年。

9 曹洪欣主編『珍版海外回帰中医古籍叢書』北京：人民衛生出版社、2008 年。

10 「日本内閣文庫所蔵元明医籍の初歩考察」第三屆國際漢学会議論文集曆史組『性別与医療』台北：中研院近史所、2002 年、213-241 頁。



図6.『日本現存中国稀覯古医籍叢書』



図7.『海外回帰中医善本古籍叢書』



図8.『海外回帰中医善本古籍叢書・続』



図9.『海外回帰中医古籍善本集粹』



図10.『珍版海外回帰中医古籍叢書』

山茂久氏の招きで医学史研究班のメンバーとなり、帰国後は医学史教育において、学生に日本の医学史研究の現状と、日本の図書館を利用した古医籍の研究方法を詳細に紹介してきた。これらの授業は学生に歓迎されるだけでなく、医学史研究機関に注目され、2003年以降、梁氏は講座の内容を整理して『中華医史雑誌』に発表している¹¹。中国の若手研究者が集まる「中国中医薬古籍整理研究業務培訓會議」や国家図書館などで、研究者や市民を対象に日本の医学図書資源を紹介し、日本の図書館を利用する古医籍研究の方法を広げようと尽力した¹²。目下、日本の図書館のネット上の資料は、中国の医学史研究者、特に大学院生にとっては欠かせない重要な資料となっている。

梁永宣氏は帰国後、日本の医学史研究者を招いて北京中医薬大学で学術交流

11 梁永宣「網絡資源在医史文献研究中的应用」『中華医史雑誌』33(2)(2003年)、65-69頁。

12 梁永宣・甄雪燕「網絡中新資源信息在医史研究中的应用」『中華医史雑誌』42(6)(2012年)377-379頁。

を展開した。例えば、日本医史学会理事長小曾戸洋氏からは「五十二病方」の研究を、真柳誠教授からはアジア文化圏の古医籍調査研究を紹介していただいた。日本の医学史研究者が新たな成果を発表すると、梁氏はすぐに彼らを北京中医薬大学に招いて学生と交流する機会を作り、中国の新聞で発表するようにしている¹³。2015年5月、梁氏は北京中医薬大学を代表して、第1回中日韓三国共同参加の『傷寒論』学術シンポジウムを主催した。

現在、梁氏は中華医学会医学史分会の主任委員として、2013年には中華医史のQQ公式アカウントを、また2014年には医学史研究のWechat公式アカウントを開設している。QQには全国から313名の医学史教育研究者や、修士・博士課程在学学生が加入し、Wechatにはほとんどが若手の112名の中国医学史研究者が加入している。これらの現代的な情報交換を通して、中国各地ないし世界の医学史研究者たちが迅速に研究の現状や会議の情報を交換し、新たな問題についての議論もできる。活発な学術交流を行い、すばらしい成果を生み出している。

4. 郭秀梅

1992年に日本へ留学した郭秀梅氏は、順天堂大学医学部医史学博士課程を修了し、現在は北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部客員研究員、日本医史学会代議員を務める。

1995年、北里研究所と順天堂大学に留学中だった郭秀梅氏は、茨城大学・真柳誠教授の推薦により、日文研・山田慶児氏の医学史研究班に参加して、日本における20年に及ぶ医学史研究を開始した。郭氏は毎年日中間を往復し、中国に日本の医学史研究の進展を伝え、第23回日本医史学会矢数道明賞を受賞している。

郭氏は主に日本の漢方医学研究者の書籍の校注・編集・翻訳を行っている。森立之の『傷寒論攷注』『素問攷注』『本草経攷注』『本草経集注』、山田業広の

13 梁永宣「日本各地収蔵中医古籍的図書館（一）宮内廷書陵部」『世界中西医结合雑誌』8（1）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（二）国立公文書館内閣文庫」同8（3）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（三）静嘉堂文庫」同8（5）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（四）杏雨書屋」同8（7）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（五）京都大学」同8（11）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（六）東京大学」同8（12）（2013年）；「収蔵中医古籍的日本図書館（七）早稲田大学」同9（2）（2014年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（八）蓬左文庫」同9（4）（2014年）。



図 11. 校注『金匱要略集注』

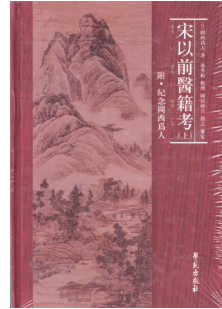


図 12. 校注『宋以前医籍考』



図 13. 校注『素問釋義』

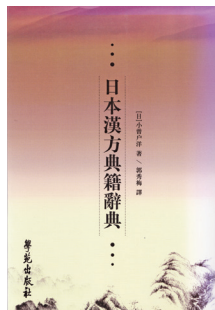


図 14. 訳著『日本漢方典籍辞典』

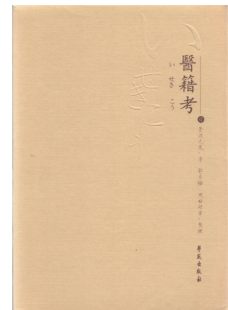


図 15. 校注『医籍考』

『素問次注集疎』『九折堂医書・千金・外臺札記』『金匱要略集注』、伊沢棠軒の『素問釋義』『金匱玉函要略私講』、鈴木良知の『傷寒論解故』、丹波元胤の『医籍考』、岡西為人の『宋以前医籍考』などが、既に中国で出版されている。また、『日本医家傷寒論注解輯要』『日本医家金匱要略注解輯要』の編集出版の他、小曾戸洋の『日本漢方典籍辞典』も翻訳出版している(図 11-15)¹⁴。現在、真柳誠

14 郭秀梅・岡田研吉編『傷寒論攷注 上・下(附 金匱要略攷注)』北京:学苑出版社、2001 年;『素問攷注 上・下(附 四時經攷注)』学苑出版社、2002 年;『本草經攷注 上・下(附 枳園叢攷)』学苑出版社、2002 年;郭秀梅・岡田研吉編、森立之ら定補『本草經集注』学苑出版社、2014 年;郭秀梅・岡田研吉編、山田業広著『素問次注集疎 上・下』学苑出版社、2004 年;郭秀梅・岡田研吉編『九折堂医書・千金・外臺札記』学苑出版社、2008 年;郭秀梅・岡田研吉編、伊沢棠軒著『素問釈義 上・下』学苑出版社、2005 年;郭秀梅・岡田研吉編『金匱玉函要略私講』学苑出版社、2005 年;郭秀梅・岡田研吉・崔為編、山田業広著『金匱要略集注』学苑出版社、2009 年;郭秀梅・岡田研吉・王少麗編、鈴木良知著『傷寒論解故』学苑出版社、2010 年;郭秀梅・岡田研吉編、丹波元胤著『医籍考』学苑出版社、2007 年;郭秀梅・岡田研吉編、岡西為人著『宋以前医籍考 上・下』学苑出版社、2010 年;郭秀梅・岡田研吉編『日本医家傷寒論注解輯要』北京:人民衛生出版社、1996 年;『日本医家金匱要略注解輯要』北京:学苑出版社、1999 年;郭秀梅訳、小曾戸洋著『日本漢方典籍辞典』北京:学苑出版社、2008 年。

氏が2015年に出版した『黄帝医籍研究』の翻訳に着手している。郭氏は、『皇漢医学叢書』以来、中国で日本の漢方医学著作を最も多く翻訳・紹介してきた研究者である。

5. 梁嶸

私は北京中医薬大学中医診断学部教授、中国中西医结合学会診断学分会秘書長、中華医学会健康管理学分会常委を務める。1994年に、中国教育部の派遣で、日本一般財団法人霞山会の資金提供により、初めて日文研で学術交流を行った。その後来訪研究員と外国人研究員として日文研に滞在している。

山田慶児、栗山茂久、Frederik CRYNS 諸氏の指導を受け、三氏の伝統医学の論理的思考方式の探求や、民間生活に根ざした医学問題の提起、証拠重視の方法論の重要性を認識した。これを基本に、私は中医の舌診の科学的意味を中心とする研究を始め、舌診における色の定量的研究を行い、舌診を人間ドックに応用し、舌診史および舌診技術の応用に関する研究論文を60余本発表してきた¹⁵。

中日間の学術交流を促すために、私は日文研の山田慶児、栗山茂久、山田奨治諸氏、そして京都大学、日本歯科東洋医学会の研究者を北京中医薬大学に招いて学術交流を行い、大学院生と学部生の授業において、日本漢方医学の歴史、診断学の知識、日本漢方医学の研究状況を紹介してきた。また、大学生を組織して日本の漢方医学教育の現状を調査し、それに対する学生の認識を深めた。

15 梁嶸「中日伝統医学中舌診図の特徴及其医学観的探討」『自然科学史研究』22(4) (2003年); 同「《敖氏傷寒金鏡録》在日本流伝情況の若干調査」『中華医史雑誌』33(1) (2003年); 同「1949年以前中医舌診学術發展歷程の探究」『自然科学史研究』23(3) (2004年); 同「明末清初の舌診研究特征探討」『江西中医学院学报』17(3) (2005年); 同「日本江戸時代漢方舌診專着的研究」『中華医史雑誌』35(3) (2005年); 同「日本漢方医学興衰の歴史啓示」『國際中医中藥雜誌』28(2) (2006年); 梁嶸「舌診の歴史沿革」『江西中医学院学报』18(3) (2006年); 梁嶸・王盛花・李燕・侯楊方・李方玲「清代舌診医案外感病与内傷病的舌象特征研究」『江西中医薬』20(2) (2008年); 梁嶸「中日伝統医学の舌診—相違点の背景」『漢方の臨床』55(2) (2008年); 梁嶸・楊新宇・王召平「從《黄帝内經》看中医健康観与健康維護」『中華健康管理学雑誌』5(4) (2011年); 梁嶸・楊新宇・王召平「探索食物“性味”理論的科学内涵,更好地為治未病服務」『世界科学技術—中医薬現代化雑誌』13(4) (2011年); 梁嶸「外感病に対する舌診の形成」『中医臨床』33(4) (2012年); 梁嶸・王召平「論感知的身体在医学診断学研究中的重要性」『江西中医学院学报』24(5) (2012年)。

2016年、日文研は創立29年目を迎える。日本に滞在したことのある中国の医学史研究者にとって、日文研に滞在した日々は人生の中で忘れがたい経験となっている。ここで私たちは中日医学交流の絆を結び、これからも私たちの手でこの絆を深めていきたいと思う。私たちはいつか日文研に再び集まり、医学史の元教員と現教員と一緒に記念写真を撮りたいと思う。

(翻訳：陳凌虹)